報告

リージョナルステート研究委員会平成 28 年度第 3 回研修会

北海道におけるこれからのまちづくりと観光を考える

中 田 光 治
杉 本 英 一

1. はじめに

平成 29 年 2 月 24 日(金)、リージョナルステート研究委員会平成 28 年度第 3 回研修会を開催しました。今回は、地域主権分科会の会員で早苗コンサルタント株式会社技術顧問の小町谷信彦様(前国土交通省北海道局の開発政策分析官)を講師に「北海道におけるこれからのまちづくりと観光を考える」と題しまして講演を行いました。リージョナルステート研究委員会の地域主権分科会では、自然エネルギーを地域資源と位置づけて、北海道における社会資本整備のあり方、水ビジネスの可能性、集約型都市構造型等について勉強を重ねてきました。

講師の小町谷信彦様は、平成 28 年 3 月に国土交通省北海道局を退職されるまでの約 36 年間、国営滝野すずらん丘陵公園、小樽道路事務所、建設部河川工事課、事業振興部都市住宅課、寒地土木研究所、小樽開発建設部等に勤務され、北海道開発政策に通暁された方です。今回の講演会は、そうしたご経験や知見を踏まえ、小町谷信彦様から「これからの北海道のまちづくりや観光について会員の皆さんと議論したい」という要望を受けて企画したものです。

当日は、リージョナルステート研究委員会会員や一般の方々等、20 名の参加者があり、講演会、質疑応答等活発な議論がなされました。その講演会の様子を報告させて頂きます。

写真-1　第 3 回会開催状況

2. 講演会の内容について

(1) 地域づくりを考える視点

北海道総合開発計画・北海道総合計画というマクロの方向性、方針と個別の地域計画、戦略といったミクロの地域条件、経緯に基づく特殊解の両面があり、グローバルに稼げる都市＋里山資本主義(地産地消・域内経済、スローライフ、生活重視、ことから心へ)の地域といった多様性と両者のバランスが重要と考えます。

人口減少、緊縮財政により地域間競争がますます激しくなる中で、勝ち残り地域(人が集まる)となる条件として、居心地がよく美しい空間(ハード)と楽しく寛げる時間(ソフト、ヒューマン)大切となるといった説明がありました。

(2) 地域を活性化させるための空間づくり

地域活性化の必要条件は「人が集まる」ことであり、「人が集まる空間づくり」です。すなわち空間、ソフト、人の魅力で人を集めるためのトータルデザインが大切です。特にポイントとなるのは、中心市街地であり、各種の制約の中で地域それぞれの特殊解が求められています。

「人が集まる空間づくり」のポイントとして以下が考えられます。

① 方針：機能の複合化・集中
② 手法：リノベーション、コンバージョン
③ 差別化：デザイン性＋使いやすさ、居心地の良さ、楽しさ
④ 主体：民間活力＋パートナーシップ

⑤　計画：漸進的シナリオ（すぐ取りかかれる小さなことから始めて、拡大・発展、試行錯誤で修正しながらの成功体験の積み重ね）

⑥　成果：人が集まる空間の創出（生活の必需施設、行きたくなる魅力的な施設・空間）

⑦　目標：人が集まり、地域が活気づく

(3) 中心市街地活性化に関するトピックス

岩手県紫波町の民間主導による駅前開発としてのオーガルプロジェクトが取り上げられました。

図書館や地域交流センター、子育て応援センター、医院、飲食店等からなる官民複合施設、バレーボール専用アリーナやホテル等の民間複合施設、岩手県フットボールセンター、役場新庁舎の各施設特性に応じた PPP 手法、オーガルプラザ（SPC）を核とした関係機関の連携により、中心市街地の活性化に寄与している旨、説明がありました。

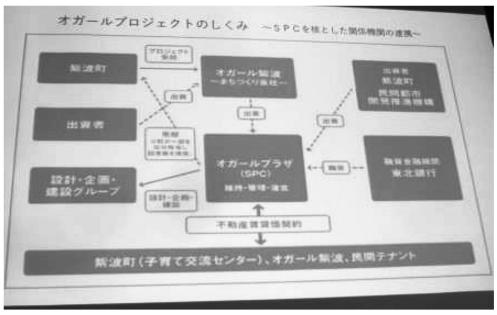

写真-2　オーガルプロジェクトの説明

次に、街の賑わいを生み出す各種手法、成功事例のアラカルトを多数の写真によりフラッシュ的に紹介されました。概要は以下の通りです。

○機能の複合化・集中：長岡駅前再開発等

○庁舎を拠点とした再開発：白石区、東京・文京区

○拠点施設としての多様な図書館：遊び場との融合草の根リサイクル図書館「まちライブラリー」

○遊休地の暫定活用：わいわい！コンテナ（佐賀駅前）

屋台村（帯広等）、仮設劇場（東京・淺草寺門前）

○仮設装置による非日常化：街路・空地等にベンチ・テーブルや仮設遊具を置き憩いや遊びの空間を創出する「プレイスメイキング」、空地を利用してどこでもピクニック（東京ピクニッククラブ）

○滞留空間のある駅前広場：日向駅、姫路駅

○賑わいのある街路：歩行者専用化した欧州の事例

○拠点施設を結ぶ街路：長野市善光寺表参道

○シェアードスペース：出雲大社通り、道後温泉

○店舗と街路の中間領域の活用：憩い空間の創出

○サードスペースの新展開：店舗併設カフェ・パブ（コインランドリーカフェ、サイクルショップパブ）

○パークレット：路側パーキング等の公園化（米国）

○エリアリノベーション：家守プロジェクト、岡山

○PPP：ニューヨーク・ブルックリンズブリッジパーク、シカゴ・ミレニアムパーク

○指定管理：グルメスポット化した福岡市水上公園民活で再生した千葉・昭和の森キャンプ場

○シティリペア：市民による手作りまちづくり運動（米国・ポートランド）

写真-3　導入事例を紹介される小町谷講師

(4) 観光地づくりに関する事例の紹介

観光地づくりに関して、いくつかの視点で参考になりそうな事例についての多数の写真による紹介がありました。概要は以下の通りです。

○美しい風景になる道：世界一美しい道「アトランティックオーシャンロード」（ノルウェイ）、ミルフォードロード（ニュージーランド）、美瑛

○景観を楽しませる演出：迫力満点の展望台（ノルウェイ・フィヨルド、中国・天空の路）

○景観から経済価値：カフェ崖の上（定山渓）、レストラン PRAVO（ニセコ）、六花亭函館五稜郭店

○人を集められるデザイン力：馬頭広重美術館（栃木・那珂川町）、地中美術館（香川・直島）

○美味しい田舎：A 級グルメのまちづくり（島根・邑南町）、ジャムズガーデン（山口・周防大島）

○温泉地のリノベーション：山形・銀山温泉、温海温泉

○リゾートの公共空間：街並み、空港、港、道路

(5) 北海道のまちづくりについての提案

まちの賑わいの創出という観点から、議論のたたき台として、以下の提案がありました。

1) 街路の活性化

○歩道のない 2 車線街路→路側帯を拡大（シェアードスペース）、1 車線化（一方通行化）：①社会実験、②歩行者優先舗装にリノベーション

○広すぎる街路（両側歩道の 2 車線道路）

①車線を用途転換（コンバージョン）、一方通行化：①屋台街化、②パークレット（カフェテラス）と路側注車帯化、③緑地と縁台、ベンチの休憩スポット化

○一方通行の街路→歩行者優先化：歩行者優先舗装にリノベーション、速度規制強化、ハンプ・クランクの設置

2) オープンスペースの活性化（実験的、段階的な施策展開）

○滞留空間の創出：落ち着ける休憩スペース（ベンチスペースの自己領域化等）

○多様な利用の促進：利用規制の緩和、イベントによる多様な利用の誘導

○街路の広場化：社会実験、イベント→広場にコンバージョン

3) 冬季の滞留拠点の創出

(6) 北海道の観光地づくりについての提案

議論のたたき台として以下の提案がありました。

1)「国際水準の観光地の形成」のアイデア

①国際的リゾートゾーンの形成

○ニセコエリアを核とした広域的リゾート（札幌圏＋道南圏）

・山岳型ウインターリゾート：ニセコ、ルスツ、キロロ

・都市型観光地：札幌（コンベンション）、函館（歴史遺産）、小樽（歴史遺産）

・海岸型サマーリゾート：積丹エリア

・温泉療養型リゾート：登別エリア、定山渓エリア、洞爺湖エリア

・長期滞在拠点：千歳周辺エリア（千歳、苫小牧、白老）

2) 国内・道内旅行活性化」のアイデア

非観光エリアの草の根観光地化（簡易な宿泊施設の提供）

○オートキャンプ場のリノベーション（グランピング）

○空き家の簡易宿泊施設化

○民泊（農家、牧場、魚家）

ロングステイ、お試し居住等により、地方への移住・定住へ

3. 質疑応答について

講演の後、参加者から質問が出されました。小町谷信彦様は質問に丁寧に回答されていました。質疑応答の概要は、以下の通りです。

質問 1. 北海道では、観光地に外国資本が入ってきて不動産等を買いあさっている様ですが、これについてどのように感じていますでしょうか。

回答：質の低い開発を排除して乱開発を防ぐことは喫緊の課題で外国資本も含めた規制は大変重要だと思います。また、地域経済の観点からは地元資本が開発の中心になるのが望ましいとは思いますが、例えば、ニセコ地区のように国際的にも最高水準のリゾート地を目指す場合、それに見合ったクオリティの高い開発ノウハウ・実績があるかどうかでディベロッパーを選別し、優れた開発ポリシーを持った外国資本は積極的に誘致することによって地域のブランド価値を高めていくことが肝要だと思います。

質問 2. 北海道の観光や交通サービス、特に鉄道路線の維持について、どのようにお考えでしょうか。

回答：北海道は、全体として人口密度が低い上に札幌圏に人口が集中しているため、地方部における鉄道のサービスレベルは低く、広域的に分散しています。観光地を巡る周遊観光は貸し切りバスで、そして近年主流となっている個人旅行では、マイカーやレンタカーが主要な交通手段になっていると思いますが、今後の北海道人口の減少を踏まえると鉄道路線の維持については、どちらにしても必要な高規格道路等の道路維持とダブルで負担する必要があるかどうか、ケースバイケースで総合的に判断する必要があると考えます。ただ

し、観光を支えるのは快適な移動インフラなので交通の問題は重要だと思います。また、観光振興という観点では、沖縄県と北海道の観光予算を比較すると桁が一つ違います。今後は、北海道の基幹産業としての位置づけにふさわしい予算付けに期待したいものです。

質問 3. まちづくり・観光・地域活性化は、主体となる人がいないと動かないように思います。この点はどのように解決するのが良いでしょうか。

回答：私が関係した事業について、地元の人が当該地域の魅力を再発見することが、一番大切な動機となっています。他には、仲間がいること、バカになれること、若者を惹きつける何かがあること等です。また、こういった仲間がいることも、観光振興や地域活性化に必要不可欠だと思います。

質問 4. まちづくりや地域活性化には、その事業費が問題になると思います。事業費用をどのように集めれば良いのでしょうか。

回答：これも大変難しい問題で、効果的で、決定的な方法はありません。ただ、駅前の市街地再開発事業等、その都市の規模に相応しい計画を策定し、身の丈に合った事業を施行することが最も重要なことだと思います。例えば、道北の名寄市風連駅前の再開発事業は、2 階建ての店舗や公営住宅を中心とし、基本的には道路や都市公園を充実させた計画になっています。

質問 5. ご説明の中で市役所の庁舎建設を PFI 又は PPP で実施したという説明がありましたが、実際にどのような形態、内容で事業が実施されたのでしょうか。

回答：あの事例は、私も直接、事業に参画した訳ではありませんので、具体的な参画事業者や業務代行者、協力会社等はわかりません。ただ、市役所の庁舎自体を建設するのに、民間の資金、人的資源、事業のノウハウを活用できたということから考えますと、民間事業者にとっても大きな魅力、事業利益が得られる見通しがあったからではないかと思われます。例えば、役所の庁舎の中に会議室を設置し、それを管理・運営できるとか、コンビニ、飲食店を内部に立地させることが認められたことです。もちろん図書館、老人福祉センター、市民文化センター、公営住宅等の公共施設も含まれます。鉄道駅に直結しているとか、他の公共・公益施設と一体的かつ複合的に当該庁舎を活用できる等の魅力がなければ事業として成立することは難しかったと思います。

以上の他にも数多くの質問があり、活発な質疑応答が交わされました。講演会は予定の時間を超過し、参加者に惜しまれながらの散会となりました。

4. 終わりに

今回、地域主権分科会主催の講演会では、北海道開発局に長年勤務された小町谷信彦様に、北海道におけるこれからのまちづくりと観光について、北海道のまちづくりや観光の振興、今後のあり方等について、最新の事例や情報を提供して頂きました。

地域主権分科会では、今後も、北海道の地域活性化に関する情報を、幅広い観点から発信していきたいと考えています。

写真-4　質問する滝澤代表と答える小町谷講師

中　田　光　治(なかた　こうじ)

技術士（建設／上下水道／農業／水産／環境／総合技術監理部門）

日本技術士会北海道本部リージョナルステート研究委員会　副代表
地域主権分科会　幹事長
防災委員会防災教育 WG
株式会社東亜エンジニアリング
執行役員技術顧問

杉　本　英　一(すぎもと　えいいち)

技術士（建設／総合技術監理部門）

日本技術士会北海道本部
リージョナルステート研究委員会
地域主権分科会　幹事
一般財団法人北海道建築指導センター
審査部確認担当課長